

病害虫発生予報 第7号(10月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
トマト ミニトマト	黄化葉巻病	多	野菜・花 き全般	シロイチモンジヨトウ ハスモンヨトウ オオタバコガ タバココナジラミ オンシツコナジラミ ミナキイロアザミウマ ミカンキイロアザミウマ	やや少 並 並 やや少 並 並 並
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病 つる枯細菌病	並 並 並			
ダイコン ハクサイ キャベツ	コナガ	並			
野菜・花 き全般	アブラムシ類 ハダニ類	並 並	カンキツ	ミカンハダニ	やや少
			果樹全般	カメムシ類	多

気象予報

1か月予報（予報期間 9月20日～10月19日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

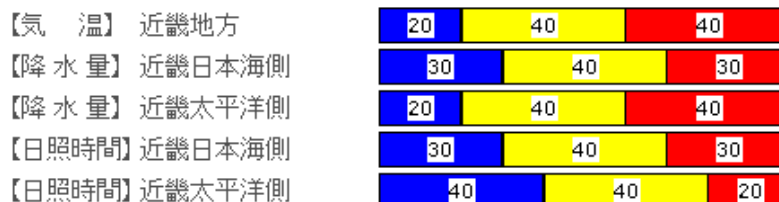
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、近畿太平洋側では、平年に比べ晴れの日が少ない見込みです。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、近畿太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、近畿太平洋側で平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並または低い確率ともに40%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

10月	月平均気温 (平年値) (°C)		月降水量 (平年値) (mm)	
	和歌山	18.8	和歌山	122
潮岬	19.8	潮岬	244	

I. 野菜・花き

<トマト、ミニトマト>

1. 黄化葉巻病

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の施設栽培ミニトマトにおける9月下旬の発生ほ場率は8%（過去8年間の平均3%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培ミニトマトにおける8月中旬の発生ほ場率は100%（過去8年の平均35%）、発病株率は61.6%（過去6年の平均8.8%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培のミニトマトやトマトでは生育初期に感染すると被害が大きくなるため、施設開口部へ目合い0.4mm以下の防虫ネットを展張し、ウイルスを保毒したタバココナジラミの侵入を防止する。さらに、外張り資材に紫外線除去フィルムを使用すると侵入防止効果が高まる。
 - ② 定期的な薬剤散布により生育初期のタバココナジラミ防除を徹底する。
 - ③ 発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取り、直ちに土中に埋めるか、ビニル袋に密封して完全に枯死させてから処分する。
 - ④ 家庭菜園を含む露地栽培トマトについては、栽培終了後は速やかに全株を引き抜き、野積みにした上に古ビニルなどで2週間以上覆ってコナジラミ類を死滅させる。
 - ⑤ タバココナジラミは寄主範囲が極めて広く、多くの雑草にも寄生するので、施設内および施設周辺の除草を徹底する。
 - ⑥ 平成26年度病害虫発生予察注意報第3号（8月29日発表）を参照する。

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 10月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 抑制栽培では、開花期ごろからの発生に注意する。
 - ② 多湿ほ場で発生しやすいので、排水を良くする。
 - ③ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 10月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 開花期から収穫末期まで発生する。乾燥条件が続くと発生が多くなる。
 - ② 発生初期より防除を行う。

3. つる枯細菌病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月下旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。

- ② 10月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 本病は、褐斑病、褐紋病と葉の病斑が似ているので注意する。褐斑病、褐紋病が日光に透かしても不透明であるのに対し、本病は光が透けて見えることで区別できる。
 - ② 防風ネットの発病抑制効果は高い。
 - ③ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

<ダイコン、ハクサイ、キャベツ>

1. コナガ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0.2頭）、和歌山市10頭（過去3年の平均3.7頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。
 - ② キャベツ、ハクサイでは、収穫後に作物残さを放置するとそこが発生源になり、周辺のほ場に成虫が分散して発生が多くなるので、収穫後は速やかに残さをすき込む。

<野菜・花き全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は20%（平年20%）、寄生葉率は4.0%（平年1.7%）、ワタアブラムシの発生ほ場率は30%（平年24%）、寄生葉率は7.0%（平年4.2%）であった。
 - ② 黄色水盤（紀の川市）への9月1～20日の飛来数は、316頭（平年58頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① シルバーマルチは有翅虫の飛来防止効果がある。
 - ② イチゴなど施設栽培では定植前後の防除を徹底する。
 - ③ ワタアブラムシに対してネオニコチノイド系薬剤の感受性低下がみられる地域があるので注意する。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬のナミハダニの発生ほ場率は10%（平年13%）、寄生葉率は0.5%（平年1.9%）、カンザワハダニの発生ほ場率は20%（平年20%）、寄生葉率は7.5%（平年3.4%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬のハダニ類（ナミハダニ、カンザワハダニ）の発生ほ場率は11%（平年30%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① キクに発生したナミハダニが移動するので、キク栽培ほ場に近いほ場では特に発生に注意する。

3. シロイチモジヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は5%（平年30%）、寄生株率は0.5%（平年5.5%）であった。

② フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平
年24頭）、御坊市28頭（平年38頭）、印南町0頭（平年52頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 中・老齢幼虫は防除効果が低いので、若齢幼虫対象の初期防除に努める。

4. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は20%（平
年37%）、寄生葉率は1.0%（平年2.9%）であった。

② 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は47%（平
年33%）、寄生株率は8.9%（平年5.1%）であった。

③ フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市26頭（平
年314頭）、和歌山市86頭（過去3年の平均1,401頭）、御坊市379頭（平
年483頭）、印南町8頭（平年138頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ふ化幼虫の集団が分散するまでの若齢幼虫に防除するよう心がける。

② 薬剤抵抗性の発達を抑えるために、同一系統の薬剤の連用を避ける。

5. オオタバコガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培エンドウにおける9月中旬の発生ほ場率は16%（平
年20%）、寄生株率は1.6%（平年2.3%）であった。

② フェロモントラップによる9月1～20日の誘殺数は、紀の川市14頭（平
年5.8頭）、御坊市0頭（平年3.2頭）、印南町0頭（平年5.0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 中・老齢幼虫は防除効果が低いので、若齢幼虫対象の初期防除に努める。

6. タバココナジラミ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は10%（平
年38%）、寄生葉率は1.0%（平年9.3%）であった。

7. オンシツコナジラミ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は30%（平
年36%）、寄生葉率は7.6%（平年5.6%）であった。

8. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は50%（平
年59%）、寄生葉率は8.5%（平年25.3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 促成栽培ナス等の育苗は発生ほ場の近くで行わない。また、防虫ネット
を被覆して成虫の飛び込みを防ぐ。

9. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける9月中旬の発生ほ場率は0%（平
年3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イチゴではミツバチの導入前に徹底防除を行う。

Ⅱ．果 樹

<カンキツ>

1. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（有田川町奥）における9月中旬の100葉あたり雌成虫数は無防除区0頭（平成6.4頭）、慣行防除区0頭（平成38.9頭）であった。
- ② 県北部（海南市下津町）、県中部における9月中旬の発生園率は27%（平成33%）、寄生葉率は3.0%（平成8.2%）であった。
- ③ 10月の気象予報による。

- (3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一薬剤は年2回以上使用しない。
- ② 秋期の防除が遅れた園では、早急に薬剤散布を行う。

<果樹全般>

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠

- ① 県北部における9月中旬のカキの被害果率は「富有」18.4%（平成7.9%）、「刀根早生」・「平核無」3.4%（平成0.9%）であった。
- ② 紀の川市粉河の予察灯における9月16～20日のチャバネアオカメムシ誘殺数は47頭（平成29頭）、ツヤアオカメムシ誘殺数は61頭（平成28頭）であった。
- ③ 有田川町奥の予察灯における9月16～20日のチャバネアオカメムシ誘殺数は41頭、ツヤアオカメムシが33頭であった。
- ④ みなべ町東本庄の予察灯における9月16～20日のチャバネアオカメムシ誘殺数は379頭（過去4年の平均1,578頭）、ツヤアオカメムシ誘殺数は1,627頭（平成439頭）であった。
- ⑤ 山林における当年成虫の発生量はやや少ないが、餌となるスギ・ヒノキのきゅう果が少ないことから、果樹園への飛来は多くなると予想される。

- (3) 防除上注意すべき諸点

- ① 飛来量は園地間差が大きく、特に山林隣接園では早くから被害が出やすい。
- ② 園内での発生及び被害状況をよく観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ③ 台風通過後や強風後には、一時的に飛来が多くなることもあるので注意する。
- ④ 平成26年度病虫害発生予察注意報第4号（9月9日発表）を参照する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouchou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。